

<地域経済の現場からⅡ>

天若湖アートプロジェクト

——アートで流域をつなぐ試みの報告——

吉岡久恵

1. はじめに

天若湖アートプロジェクト(天若湖AP)は、他に例のないダム湖を開催場所としたアートイベントである。2005年より毎年開催しており、京都府南丹市日吉町にある日吉ダムで、全長4kmにおよぶインスタレーション¹⁾作品「あかりがつなぐ記憶」を中心に、展覧会や参加型のアートワークショップを行なっている。筆者はこれまでこのプロジェクトの中心スタッフとして、実行委員長やアートプログラムの企画を担当してきた。

このプロジェクトの目的は、桂川の上下流交流と、日吉ダム湖(天若湖)の新しい市民的利用方法の提案である。天若湖APの母体のひとつである桂川流域ネットワークが、課題としてきた流域連携について、シンポジウムや見学会では実現できなかった直感的な交流を、アートを介して目指すものである。

2. 地域の特徴

日吉ダムの建設に伴い造られた貯水湖・天若湖(あまわかこ)は、京都府のほぼ中央に位置する新しい湖である。この場所は日吉ダムの建設が開始される1980年代まで、宮村、世木林、沢田、楽河、上世木という天若地区の5つの村²⁾があった。

戦前までの天若地区の暮らしは、半林半農が中心であった一方、京の都で食される鮎の名産地であったり、木材を運ぶ筏の中継地があったりと、桂川(大堰川)との関わりも深かった。しかし、1951年に現在の日吉ダムの上流に関西電力の発電用のダム(世木ダム)が完成すると、桂川の水量が減り、環境が大きく変化していった。さらに、大雨が降ると、世木ダムの緊急放流による水害がしばしば発生する事態となった。

その後、1961年に桂川流域の治水と京阪神地域の水需要増大を受けて、水資源開発公団による宮村

ダム(現在の日吉ダム)の構想が発表される。水没移転を含む計画に、地元の反対の声は大きかったが、長い交渉の末、1977年に「日吉ダム実施計画調査に係る基本協定書」が天若地区と水源地域開発公団とで調印された。1987年には離村式が行われ、1998年に日吉ダムが完成し、運用が開始されることとなった。

日吉ダムは「地域に開かれたダム第一号」に指定されており、建設当時から地域への貢献が重視されてきた。ダム内部の一部がインフォギャラリーとして一般公開されているほか、周辺施設や道路の整備も行われた。ダムに隣接して造られた温泉施設スプリングスひよしは2011年に道の駅も兼ねることになり、バーベキュー施設やキャンプフィールドの整備なども行われ、全国「温泉選手権2019」で、スポーツ・レジャー部門の全国第1位になるなど観光客からの支持も得ている。

3. 「あかりがつなぐ記憶」について

天若湖APのメインプログラムである「あかりがつなぐ記憶」は、天若湖の湖面上に、LEDライトを浮かべ、かつての村の夜景を再現するアート作品である。かつての天若地区には約150軒の家屋があった。「あかりがつなぐ記憶」は、測量技術を使い、家屋のあったほぼ真上の位置にライトを浮かべている。そのため、天若地区の元住民には、どのあかりが誰の家か判別可能である。この湖面のあかりは、実行委員が水資源機構職員のサポートを受けながら、開催日初日の日中にボートで設置している。

「あかりがつなぐ記憶」の始まりは、日吉ダム水源地域ビジョン連絡会³⁾の要望を受けて、桂川流域ネットワークが実施した天若湖の活用アイデアコンテストだった。2004年に行われたこのコンテストで、人気を集めたのが、京都造形芸術大学の大学生からの提案だった。この案を桂川流域ネットワークとNPO法人アート・プランまぜまぜが合同で、アサヒビール文化財団の助成金に応募し、採択されたことで、一気に実現することとなった。

2005年当初、実現できたのは5つの村のうち宮村、世木林の2つだけだったが、技術の改良を重ね、2009年には水没集落すべての点灯に成功した。来場者は毎年300名ほどであり、実行委員会では無料のガイド付き観覧バスを運行している。この観覧バ

スでは、都市部からアートイベントを目的に訪れた人と、天若地区の元住民が同乗し、交流する場面がしばしば見受けられる。

天若湖 AP では、「あかりがつなく記憶」だけでなく、2005年から現在に至るまで、かつての天若集落を撮った写真展の開催や、若手の芸術家が天若湖からイメージを広げた美術作品展、水没移転者のトークイベントなど様々な企画も実施している。

4. 天若湖アートプロジェクトの評価

天若湖 AP の評価は3つの側面から可能であると考えている。1つ目はアート作品およびアートイベントとしての評価であり、2つ目は河川市民活動としての評価、3つ目は地域活動としての評価である。

1つ目のアート作品、アートイベントとしての評価については、当初の目的であった、桂川の上下流交流を促すという面で一定成功しているといえる。毎年、大阪や京都市内からアートの観覧を目的に来場者が訪れ、作品を通してダム役割、上流の人々の犠牲について体験する機会を提供している。しかしながら、アートイベントとしての全国的な知名度は決して高くはなく、広報力が課題といえる。

2つ目は河川市民活動としての評価である。近年は桂川にとどまらず、琵琶湖・淀川水系を視野に入れた流域ネットワーク活動が盛り上がっている。天若湖 AP の活動もその一翼を担っており、プロジェクトが継続的に行われていることが流域ネットワークの発展に貢献しているといえる。さらに、外部からの評価としては、2011年に市民による川づくりの全国交流会である「いい川いい川づくりワークショップ」において準グランプリを受賞している。全国的にもユニークな流域連携活動として評価を受けている。

3つ目は地域活動としての評価である。この部分に関しては、プロジェクト開始当初は内外から厳しい評価を受けた。日吉町の住民からの積極的協力が得られなかったからである。しかし、時間の経過とともに実行委員会が、日吉町の地域づくりの場面で、頼りにされることが増えていった。それでも、現在に至っても日吉町からプロジェクトへの参加はあまりない。関わりにくい原因の1つとして、ダム建設が残した地域の分断が挙げられよう。補償金ひとつをとっても、ダム建設が地域に残した傷は計り知れ

ないものがある。

様々な試行錯誤をへて、プロジェクトの開始から15年がたった現在、実行委員会では、地域との関わりを考える際に、地域を3層に分ける方法をとっている。1層目はすでに存在しない天若地区であり、2層目は現在日吉ダムのある南丹市日吉町、3層目は桂川流域である。実行委員には1層目の日吉町在住者がほとんどいないため、一見よそ者の集団ように見えるが、3層目の桂川流域の住民として主体的に関わっているという位置づけをしている。ダムが流域全体の利益を目的に建設されたものであるとすれば、流域の住民が上流への思いをもってプロジェクトを実施することの意義は大きいと考えている。

5. おわりに

天若湖 AP が流域間のコミュニケーションによって一定の成果を得ていることは、これまで述べたとおりである。一般的に「流域」という単位の地域は知覚しにくい。しかしながら、プロジェクトを開始した15年前より、流域思考は重要度を増してきているといえる。というのも、昨今の水害の増加である。2019年に台風19号が日本各地で甚大な被害を与えたことは記憶に新しいところである。台風や豪雨による同様の水害は、地球温暖化による影響で、今後さらに被害が大きくなることが予想されている。想定外の降雨は、各地でダムの放流や堤防の決壊による被害をおこしている。これは従来のダムや河川改修による治水が、雨量に対応できなくなった結果といえる。

桂川の上下流交流の歴史を学ぶと、舟運や筏が物流の中心だった時代には、上下流の交流は今より身近で、具体的なものだったと感ずることが多い。近代化により物流のメインは道路になり、川が生活から遠ざかることで、地域に伝えられていた水防の知恵や上下流のコミュニケーションも失われていった。

しかし、知覚はしにくいのが、治水や環境の面で、「流域」が運命共同体ことには違いない。天若湖 AP は見えにくい「流域」という地域を知覚可能なものにしようとする難題に取り組んできたプロジェクトである。流域単位で地域づくりを考える取り組みは、これからの防災にもつながっているのである。

【注】

- 1) 現代アートの形式のひとつ。空間芸術。
- 2) 2つの村(中・小茅)は水没しなかったが同時に移転した。
- 3) 日吉ダム管理所や地元自治体などで構成されていた協議会。

【参考文献】

天若湖アートプロジェクト実行委員会(2009)『天若湖アートプロジェクト—あかりがつなぐ記憶』、キョートット出版。

日吉ダム水没地区文化財調査委員会(1988)『日吉ダム水没地区文化財調査報告書』、日吉町。

(京都橘大学大学院)